小１接続期における児童の安心感を育む関わりの促進

――　スタートカリキュラムの具体を促す
小学校教職員向け『つながりガイド』の作成と活用を通して――

長期研修員　　關　百合香

《研究の概要》

本研究では、小１接続期の課題を踏まえ、スタートカリキュラムの具体化を通し、児童の安心感を育む関わりを促進することを目的とした。はじめに、質問紙調査と聞き取り調査、保育参観を実施した。次に、実態把握や「スタートカリキュラム」（国立教育政策研究所）及び「アプローチカリキュラム」（群馬県教育委員会）の考え方を組み合わせ、安心感を育む手立てとしての『つながりガイド』を作成するとともに、保幼小の接続期間を見渡すスタートカリキュラムを具体化した。その有効性の検討のため、『つながりガイド』を活用した教職員研修や互恵的な保幼小の交流、保護者への働きかけ等を実施し、事後に質問紙調査等を行った結果、教職員の協働体制を構築し、保幼小の円滑な連携が図られることにより、児童の安心感を育む関わりの促進が認められた。

キーワード　【生徒指導　児童理解　保幼小接続　スタートカリキュラム　組織的な対応　互恵的な保幼小交流】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｆ０８－０１　平成２８年度　２５９集

Ⅰ　主題設定の理由

小学校学習指導要領解説総則(2008:57)の中で、「学校は，児童にとって伸び伸びと過ごせる楽しい場でなければならない。児童一人一人は興味や関心などが異なることを前提に，児童が自分の特徴に気付き，よい所を伸ばし，存在感を実感することが求められており，そのために，生徒指導の一層の充実を図ることが必要である」と述べられている。また、小学校の入り口である１年生の接続の状況について、文部科学省の「幼少期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告)」(2010)では、「ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識（都道府県100％、市町村99％)」しているが、その一方「幼小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況（都道府県77％、市町村80％が未実施)」であるとしている。このことを受け、第２期群馬県教育振興基本計画(2014)の中で、本県は、「幼稚園や保育所等と小学校との連携･接続の推進を行い、教育課程編成に係る連携を小学校と行っている公立の園の割合を、平成30年度までに100％にしていきたい」との達成目標を掲げている。また、小学校での取組について教職員を対象とした質問紙調査(2016)を実施したところ、保幼小の接続を意識した教育課程（スタートカリキュラム）の作成が進んでいる学校の割合は、15.1％であり、接続を意識した十分な取組がなされているとは言い難い状況であることが分かった。研究協力校においても、年度末の情報交換会は行われているが、交流を含めた保幼小の接続に関する取組は、ほとんど行われていない。

これらのことから、保幼小の連携促進は喫緊の課題であり、１年生が安心・安全に小学校生活を送り、保幼小の連携に取り組んでいかなければならないと考える。しかし、文部科学省の「幼少期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告)」(2010)の中で、連携が進んでいない理由として「接続関係を具体的にすることが難しい（52％)」、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない（34％)」、「接続した教育課程の編成に積極的ではない（23％)」が挙げられている。この結果より、保幼小の接続を具体化する手立てや、相互の教育の特性の理解が十分でないことが浮き彫りとなった。これらを改善していくために、まずは小学校の教職員が、幼児期における教育と小学校教育の相違点や共通点を理解し、子どもの発達や学びのつながりを踏まえて指導・支援に生かすことで、児童の安心感を育むことへつながると考えた。

始めに、本研究では、実態把握として、小学校の教職員や保育者から滑らかな接続へ向けての取組や環境の構成の工夫、スタートカリキュラムの編成状況、入学後の児童の戸惑い等、低学年児童の保護者からは入学前後の気掛かりな点等についての実態調査を行こととした。また、保育参観も並行して実施し、幼児期の子どもの姿や、細かな指導の方法等についても把握する。次に、これらの実態把握を基に、国立教育政策研究所が示すスタートカリキュラム(以下、「スタートカリキュラム」）と群馬県教育委員会が示すアプローチカリキュラム(以下、「アプローチカリキュラム」）の考え方を組み合わせ、児童の安心感を育む手立てとして『つながりガイド』を作成し、保幼小の接続期間を見渡すスタートカリキュラム例を提示する。そして、『つながりガイド』を教職員研修、互恵的な保幼小交流、保幼小職員打合せ、保護者への働きかけにおいて活用する。この教職員研修により、「スタートカリキュラム」の考え方(子どもの育ちや幼児教育の学びを生かした学習の工夫、環境構成の工夫等)及び編成方法を、演習を通して共通理解する。このような教職員研修や会議での提案等を通し、組織的な協働体制を構築するとともに、保育者や保護者なども含め、共に子どもを育むという意識の醸成を行うことで、児童の安心感を育む関わりの促進につながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校の教職員・保育者及び研究協力校の低学年の保護者を対象とした質問紙調査及び聞き取り調査と、保育参観での実態把握の結果を反映するとともに、そこに「スタートカリキュラム」と「アプローチカリキュラム」の考え方を組み合わせて『つながりガイド』を作成し、保幼小の接続期間を見渡すスタートカリキュラム例を具体化する。『つながりガイド』の活用により、組織的な協働体制を機能させ、児童の安心感を育む関わりが促進されることの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　対象とする保幼小の接続期間及び『つながりガイド』で示すスタートカリキュラム例

本研究では、「スタートカリキュラム」と、「アプローチカリキュラム」を接続した、年長児の９月から小学校１年生３月末までを対象とする。これら二つのカリキュラムは、互恵的な保幼小交流により、関連付けるものとする(図１)。

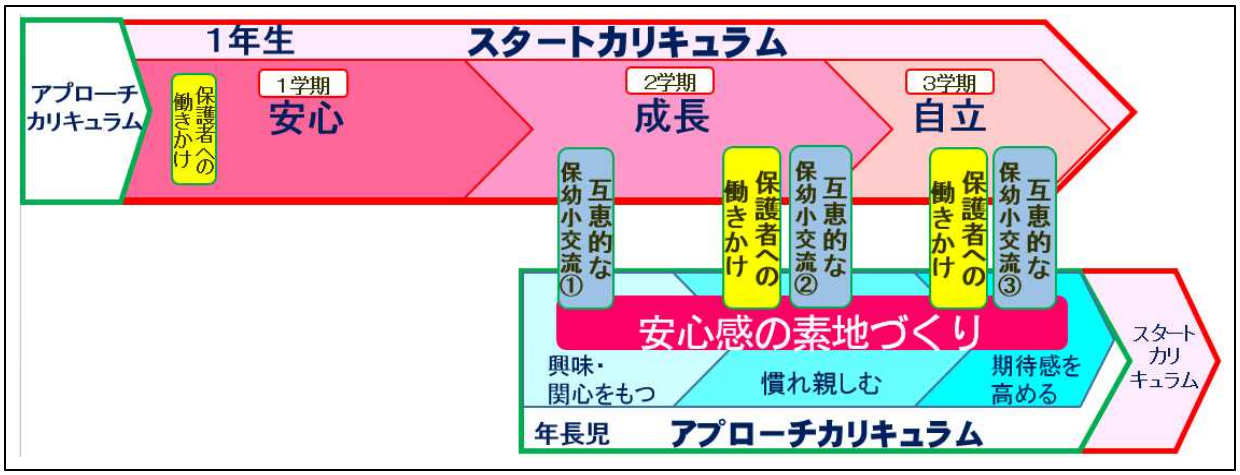


図１　『つながりガイド』で示すスタートカリキュラム例

注：「スタートカリキュラム」と「アプローチカリキュラム」を参考に筆者作成

(2)　「安心感」とは

本研究では、小学校入学から１年生３月末までを接続に係るスタートカリキュラムの期間とし、「安心」「成長」「自立」の三つの段階とした。子どもの発達の特性より、「安心」を中核とし、互いに重なり合っていると捉えた（図１）。また、入学から１学期末までを児童の「安心」の実現に力を入れる段階とする。教職員が、児童の小学校生活を送るための基盤づくりを念頭に置き、「スタートカリキュラム」の考え方や編成方法を理解し、その考え方等を生かして児童に関わることで、児童の「安心感」が育まれるものとする。児童が「安心感」を感じられるような、教職員による児童の支援・指導を「児童の安心感を育む関わり」とする。また、互恵的な保幼小交流を通し、年長児の小学校への期待感を高めことは、「安心感」につながる素地とする。この「安心感」の

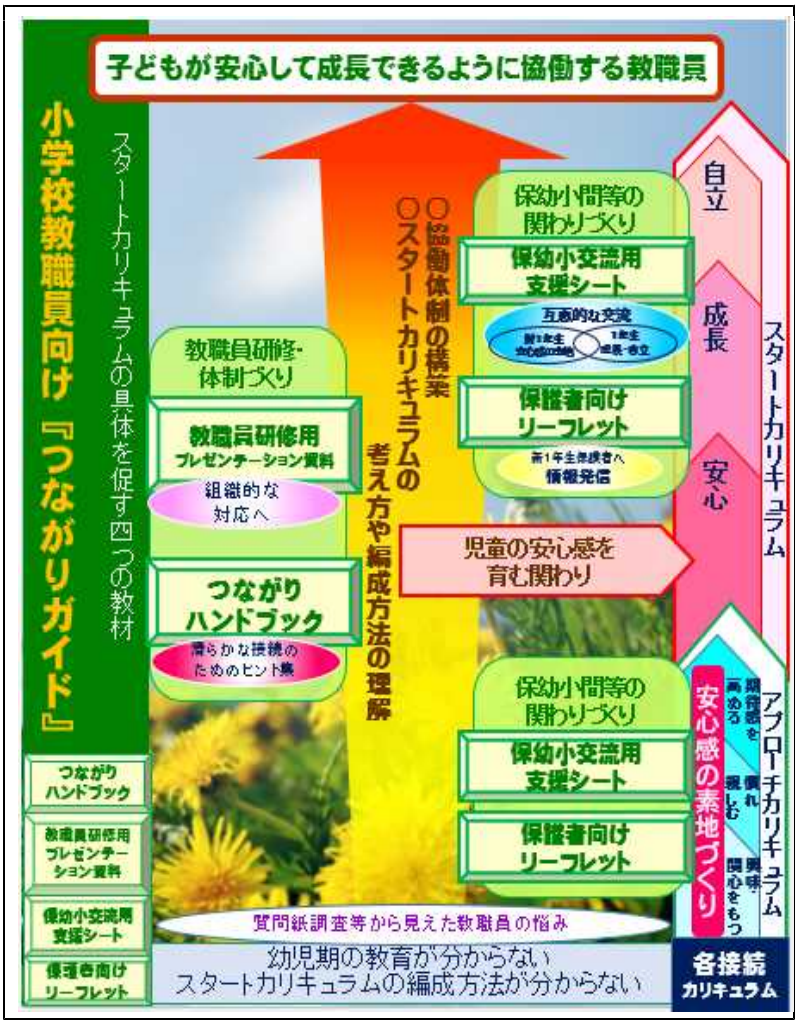


図２　研究構想図

素地は、保幼小の交流において、交流に関わる教職員・保育者が、互いの接続期におけるねらいの共通理解を図り、子どもたちに関わることで、育まれるものとする。本研究を進めるに当たっての構想を前頁図２に表す。

(3)　互恵的な保幼小交流とは

本研究においては、１年生２学期以降の「成長」「自立」の段階に、幼稚園等施設との交流に重点を置き、交流活動を計画的に進めていく。交流への取組や交流を通し、児童の思いやりの気持ちを育んだり、自己の成長を感じたりできるであろうと考える。また同時に、年長児が「小学校に入学することが楽しみだ」という期待感を持てる機会としたい。本研究では、この１年生にとっても、年長児にとっても、互いに学びのある交流を「互恵的な保幼小交流」とする。これらの考えに基づき、『つながりガイド』では、互恵的な保幼小交流の参考となる教材についても盛り込み、年長児の小学校への期待感を高め、「安心感」の素地づくりを目指していく。

２　教材の概要

(1)　児童の安心感を育む関わりを促進する小学校教職員向け『つながりガイド』の特徴

本教材『つながりガイド』は、群馬県総合教育センターにおける研修受講者及び研究協力校地域の小学校教職員・同養護教諭・保育者、研究協力校の低学年児童の保護者の接続期における実態把握を受け、滑らかな接続を行うためのニーズと「スタートカリキュラム」及び「アプローチカリキュラム」の考えを反映している。また、継続的な保育参観も並行して行い、幼児期の子どもたちの姿や学びの様子、細かな指導内容を把握し、活動例等を『つながりガイド』へ掲載した。

(2)　教材に係る実態調査

主な調査内容、対象者、調査時期、保育参観実施対象園及び時期は表１、２の通りである。これらの調査結果と見取りの結果を踏まえて『つながりガイド』の作成を行う。

表１　質問紙調査、聞き取り調査の調査対象者及び調査計画

主な調査内容 ・接続期における小学校の取組の状況と、環境構成・授業の工夫、児童の戸惑いの状況など ・入学前に保護者が知りたい情報、気掛かりな点など		
調査対象	研修講座名等	期　　日
幼稚園等保育者	10年経験者研修(17名) 幼児教育研修講座参加教職員(77名) 平成28年度特別研修員(幼稚園教諭３名) 研究協力校地域の保育者(５園・46名)	６月23日(木) ７月22日(金) ６月９日(木)、８月２日(火) ６月下旬～７月上旬
小学校教諭	ミドルリーダー研修(46名) 10年目経験者研修(55名) 平成28年度長期研修員(小学校籍)(10名) 研究協力校地域の教諭(３校・44名)	６月15日(水) ７月６日(水) ６月20日(月) ６月下旬～７月中旬
小学校養護教諭	10年目経験者研修(６名) ５年目経験者研修(４名) 研究協力校地域の養護教諭(３校・３名)	６月14日(火) ７月26日(火) ６月下旬～７月中旬
低学年児童の保護者	研究協力校の低学年児童の保護者(31名)	４月22日(金)

表２　保育参観計画

参観する視点 ・子どもの姿、学びの様子(主に年長児の活動の様子) ・指導内容(環境の構成の工夫、細かな指導・支援の方法、接続へ向けた取組など)		
対　　象		時　　期
Ａ園（幼稚園）	研究協力校への入学児童が多い園 ＊Ａ・Ｂ園は研究協力園	７月～12月　各月１回、継続して参観
Ｂ園（保育所）		７月～12月　各月１回、継続して参観
Ｃ園（幼稚園）	小学校との交流等を進めている園	６月27日(月)
Ｄ園（保育所）		７月29日(金)

(3)　実態調査の結果と考察

①　質問紙調査・聞き取り調査

ア　教職員が感じる入学時の１年生の戸惑いや安心感のために工夫している関わり方について

入学時における児童への関わり方の工夫については、「スタートカリキュラム」の考え方の柱に

沿い調査を行った。同時に、教職員が感じている１年生の戸惑いは、多いものから順に、時間割に沿っての行動、45分間の授業時間、幼児教育との学び方のスタイルの違い、生活面での変化、人間関係の変化等が挙げられた。これは、幼児教育の主体的な遊びを通して学ぶ学習スタイルと時間割に沿って自覚的に学ぶ小学校教育との違いが、児童の戸惑いとなって現れていると考えられる。また、新しい生活環境や生活のリズム、教職員を含めた新しい人間関係への変化など、児童を取り巻く環境が一変することも、戸惑いの一因となっていると考えられる。児童が安心感を抱くようにするには、徐々に適応が図られるよう、教職員が意図的に関わらなければならない。これらを踏まえ、児童の安心感を育む関わりを促進できるよう、各調査項目の結果から得られた情報を用いて提案する。

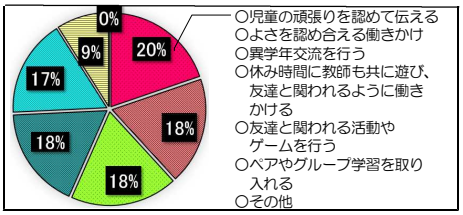


図３　新しい人間関係を築けるよう配慮していること

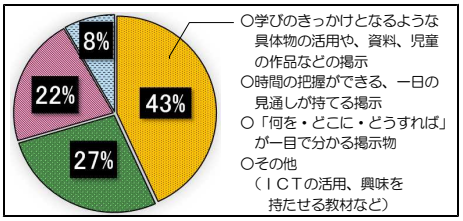


図４　環境構成の工夫について

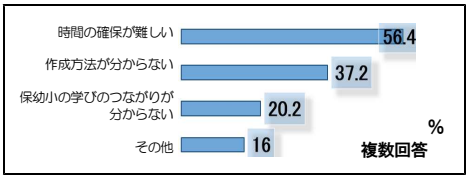


図５　スタートカリキュラムの編成が進まない理由

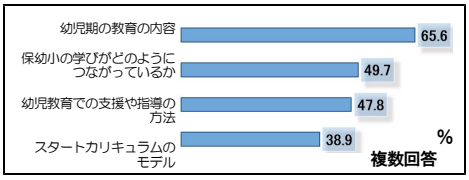


図６　スタートカリキュラム編成に必要とされる情報

イ　スタートカリキュラムについて

小学校教職員へ質問紙調査を実施するに当たり、スタートカリキュラム編成に取り組んでいる学校は少ないと予測し、まず編成状況を把握した上で、編成が進まない理由、編成する際に必要と考えられる情報について質問項目を設けた。結果は予想に沿ったものとなり、「編成・実施し、より良いものになるよう検討している」「編成・実施している」を合計すると15.1％であり、少数であることが示された。編成が進まない理由は、「時間の確保が難しい」「編成方法が分からない」「保幼小の学びのつながりが分からない」の順である（図５）。これらの結果から、時間をかけずにスタートカリキュラムの編成方法と保幼小の教育とのつながりが分かれば、課題は改善に向かうのではないかと考える。また、編成に役立つ情報についての結果は図６のとおりである。上位３位を占めるものは、幼児教育の内容や学びのつながり等についてである。これらの情報を基に『つながりガイド』の作成を進める。

ウ　入学後の関わり方の参考となる幼児教育における支援方法について（保育者への質問）

幼児教育に携わる保育者に対して、記述式の調査及び聞き取り調査を行った。内容は、小学校の教諭が滑らかな接続へ向けて参考にできるような取組についてである。具体的には、集団で話を聞かせたり、活動させたりする際の工夫点や、１年生の生活や学習場面でもヒントとなり得る環境の構成の工夫についてなどである。集団への指示の出し方の工夫点では、声の掛け方や手遊びの例、集まる場所をイラストなどで分かりやすく掲示するなどの記述が多く見られた。環境の構成の工夫では、視覚的な掲示資料により、年長児に見通しを持たせたり、理解を促したり、時計を用いて時間の流れを意識させたりするような工夫をしている保育者が多く見られた。

エ　１年生が体調不良を訴えることが多い時期とその理由について（小学校養護教諭への質問）

小学校養護教諭へのアンケートは、１年生が体調不良を訴えることが多い月やその理由を中心に調査を行った。１年生が小学校生活に慣れ始めた５月が多く、次いで２学期の始まりが多いという結果となった。１学期の保健室利用の理由は、腹痛とけがが一番多く、不定愁訴、頭痛の順になっている。腹痛、頭痛などと回答した養護教諭も、記述式の回答では、「不定愁訴もあると思われる」「学校に慣れない、幼稚園との違いに戸惑い、不定愁訴が多い」などと記述していた。不安感が体調不良へつながった可能性を感じている養護教諭が多いことがうかがえる。この不安定となる時期と、群馬県教育委員会から出されている「魅力ある学級づくりのために」（2011）の中の、『「学級がうまく機能しない状況」発生時期』の調査結果との重なりが見られるため、『つながりガイド』へ反映し、小学校１年担任へ当該時期の指導に生かせるよう提案する。

オ　１年生の保護者が入学前に知りたい情報や気掛かりな点について

保護者へのアンケートは、入学後間もない４月に実施した。質問項目は、小学校入学前の気掛かりな点、入学前に知りたいこと、子どもや保護者の安心につながる入学前後の支援についてである。気掛かりな点で多く見られたものは、新しい人間関係や学習、登下校について等、入学後の子どもたちが学校生活に慣れていけるかである。これを裏付けるように、入学後の支援として望むことに、学校の様子が分かるお便りをもらうことが多い結果となった。保護者は、子どもたちが安心して学校生活を送ることを望み、小学校でどのように過ごしているか知りたいと思っていることが分かる。その他の項目についても、『つながりガイド』へ反映する。

②　保育参観での把握

保育参観では、保育者の子どもへの関わり方や子どもたちの学びの様子を把握することを主な視点とした。保育者の子どもたちへの関わり方は、入学当初の小学校の１年担任の参考となる部分が多い。集団への話し方などは、抑揚を付けたり、時折クイズ的要素を取り入れ興味を引いたりするなど工夫点が多く見られた。また、幼児教育は、子どもの主体性を特に大切にするので、何かを決める際には、子どもに自己決定の場を与えていた。選択させる際の情報は事前に丁寧に説明するなど、子どもに寄り添った関わり方をしていることが分かった。小学校の授業場面等でも、自己決定の場を与えることは大切にしていることであり、共通する部分である。年長児の学びや育ちの様子では、接続を意識した当番活動を行っている場面が多かった。聞き取り調査によると、幼稚園教育要領等に示されていないため、清掃や給食当番などは、子どもが行わない園も複数あった。保育参観を行った研究協力園においては、ぞうきんでの拭き掃除、給食当番、係活動などを取り入れていた。また、通常の活動では、保育者が環境の構成を整えることで、子どもたちは自ら進んで、自分のペースで活動を深めることができていた。また、話や読み聞かせを聞く際には約束事があり、子どもたちは自覚して静かにするなど、約束事が定着していた。この約束事は、年少児でもしっかり定着していたことから、教職員で共通理解を図り、一貫した指導を行っていることがうかがえた。

(4)　小学校教職員向け『つながりガイド』

本教材は、①滑らかな接続へ向けたヒント集となる冊子「つながりハンドブック」と、②教職員研修用プレゼンテーション資料「入学時における児童の安心感を育むために」、③交流前の打合せで活用する「保幼小交流用支援シート」、④入学前の年長児の保護者へ情報発信として配付する「保護者向けリーフレット」の４点から構成される。『つながりガイド』の作成の視点は、表３のとおりである。

表３　小学校教職員向け『つながりガイド』作成時の視点

国や県、質問紙の調査結果による課題	課題解決のための『つながりガイド』における手立て
接続関係を具体化することが難しい	スタートカリキュラムの具体例を提案（図１）
幼児教育について十分理解できていない	保育参観等の実態把握を生かした教材づくり
スタートカリキュラムの編成方法が分からない	教職員研修においてスタートカリキュラムの編成方法について取り扱う
時間の確保が難しい	短時間で内容を把握できるよう視覚的に訴える教材づくり

①「つながりハンドブック」

小学校教職員及び保育者への質問紙調査等及び保育参観、「スタートカリキュラム」の考え方等を基にまとめたハンドブックである。教材内でスタートカリキュラムの具体例の提案を行う。全部で３章構成となっている。第１章は、幼児期の教育の特性について、第２章は、小学校入学当初における指導の工夫等について、第３章は、スタートカリキュラムの編成方法についてである。そこには、滑らかな接続へ向けた具体的な手立てとして、入学前後の支援・指導、環境構成の工夫等について掲載する。生徒指導提要(2010)で「小１プロブレム」の問題の要因の一つとして挙げられている児童の自己制御などの知的能力発達の視点も盛り込む(次頁図７)。

図７　「つながりハンドブック」の内容・ページレイアウト

表４　「つながりハンドブック」の構成

章・項　目		ページ	内　　容
はじめに		1-8	小学校教職員、保育者から寄せられた互いの教育についての疑問 幼児教育から小学校教育へのつながりの概要
１章 入学前の子どもの姿や 幼児教育について	「はじめに」の中で出された疑問へ対応	10 12 14 16 18 20 22	1　幼児教育の内容 2　園でのカリキュラム 3　子どもの見取りや評価 4　集団生活のルールや決まり 5　幼児教育と小学校教育との比較 6　卒園までに育ってほしい姿 7　小学校入学へ向けて意識している取組
２章 学びをつなぐためのヒント ～滑らかな接続のために 小学校ができること～		26 28 30 32 34	1　入学当初の子どもたちの様子 2　入学へ向けた小学校の準備・取組 3　子どもに関する情報共有 4　小学校養護教諭のアンケート結果より 5　小学校１年生の保護者へのアンケート結果より
３章 組織対応　教職員研修 ～入学時における児童の 安心感を育むために～	教職員研修へ対応	38 40 42 44 46 48 50 52	1　スタートカリキュラムとは 2　スタートカリキュラムの具体例 3　入学時の姿から目指す児童像へ 4　スタートカリキュラムの編成の手順 5　「スタートカリキュラム」の考え方を取り入れた学習活動の配列や時間配分の工夫 6　スタートカリキュラムの週案例 7　「スタートカリキュラム」の考え方を取り入れた環境構成の工夫 8　組織的な取組へ

②　教職員研修資料「入学時における児童の安心感を育むために」

入学時における児童の安心感を育む関わりを促進するために、幼児教育やスタートカリキュラムの編成方法等を理解し、組織的な対応を推進していくことを目指したプレゼンテーション資料である。この資料と「つながりハンドブック」の内容は対応している（図８）。内容は、３部制である。１部は、児童理解を図るための幼児教育についての内容である。２部は、児童の安心感を育む手立てとしての「スタートカリキュラム」の考え方や、演習を通したその編成方法である。各校の今までの実践等を生かしながら、「スタートカリキュラム」の考え方を取り入れていくという視点を大切にする。３部は、組織としての協働体制の構築についての内容である。組織対応の重要性を認識することで、これらの取組を促進しやすい環境となることを確認できる機会としたい。

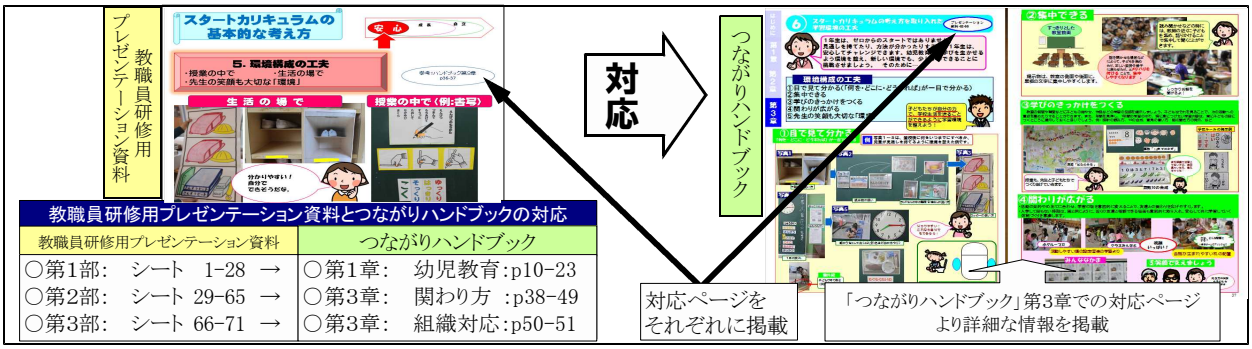


図８　教職員研修用プレゼンテーション資料とつながりハンドブックとの対応

③　互恵性のある交流活動を促進する「保幼小交流用支援シート」

保幼小の交流活動のねらいや活動内容を記入できるシートを使用することで、保幼小それぞれにとってどのようなねらいを持って交流に望むのか等を、互いに把握できたり、打合せ時間の短縮化を図ったりすることができると考える。また、交流が接続期のどの時期に該当し、どのような子ど

もの成長の姿を期待するのかを可視化することで、互恵的な交流が行える一助としたい。

④　小学校教職員及び保護者の質問紙調査を反映した「保護者向けリーフレット」

小学校の教職員を対象とした質問紙調査の結果を考察し、小学校入学までに家庭で身に付けてほしい事柄を絵や図を多用し分かりやすくまとめたリーフレットを作成する。また同様に、保護者からの質問紙調査を基に、知りたいと要望のあった情報も掲載し安心して進学を迎えられる一助となるよう配慮する。保護者の「学校と家庭が共に子どもを育てていく」という意識の高揚を図りたい。

Ⅳ　研究の計画と方法

1　『つながりガイド』を活用した実践計画と方法

(1)　研究協力校、平成28年度長期研修員への教職員研修実践（実践１）

対　　象	時　　期	ねらい
研究協力校教職員 平成28年度長期研修員	平成28年８月24日(水) 平成28年11月９日(水)	・児童理解として幼児教育の概要を理解する。 ・入学時における児童の安心感を育む手立てとして、「スタートカリキュラム」の考え方、及び演習を通してスタートカリキュラム（週案部分のみ）の編成方法について理解を図る。 ・組織を生かして対応することのよさについて共通理解する。
使　用　す　る　資　料		
◎教職員研修用プレゼンテーション資料 ◎「つながりハンドブック」第１章、第３章		

(2)　所属校小学校１年生と研究協力園、新入学児童との交流実践

①　年長児への招待状作成・配布（小学校の運動会への招待）（実践２）

対　　象	研究協力校　小学校第１学年17名、平成29年度　新入学児童14名
実　施　期　間	平成28年９月６日～９月７日
各接続カリキュラム(段階)	○アプローチカリキュラム（興味・関心）　○スタートカリキュラム（成長）
活動内容　◎関連資料名/ページ	小学校運動会への招待状作成及び招待状の配布・発送 ◎「つながりハンドブック」p41

②　保幼小交流「たのしいあきいっぱい」「つくろうあそぼう」・事前打合せ(実践３)

対　　象	研究協力校　小学校第１学年17名、研究協力園　平成29年度　新入学児童９名
実　施　期　間	授業実践：平成28年９月29日～11月１日　事前打合せ：平成28年10月20日
各接続カリキュラム(段階)	○アプローチカリキュラム（慣れ親しむ）　○スタートカリキュラム（成長）
生活科単元名　◎関連資料名/ページ	「たのしいあきいっぱい」「つくろうあそぼう」◎「つながりハンドブック」p41,「保幼小交流用支援シート」

③　保幼小交流「あたらしい１ねんせいをしょうたいしよう」、５－５交流(実践４)

対　　象	研究協力校小学校第１学年17名、小学校第５学年26名、平成29年度新入学児童14名
実　施　期　間	平成29年１月17日６校時　＊５校時：５－５交流(５年生と５歳児：年長児の交流)も実施
各接続カリキュラム(段階)	○アプローチカリキュラム（期待感を高める）　○スタートカリキュラム（自立）
生活科単元名　◎関連資料名/ページ	「あたらしい１ねんせいをしょうたいしょう」　◎「つながりハンドブック」p41

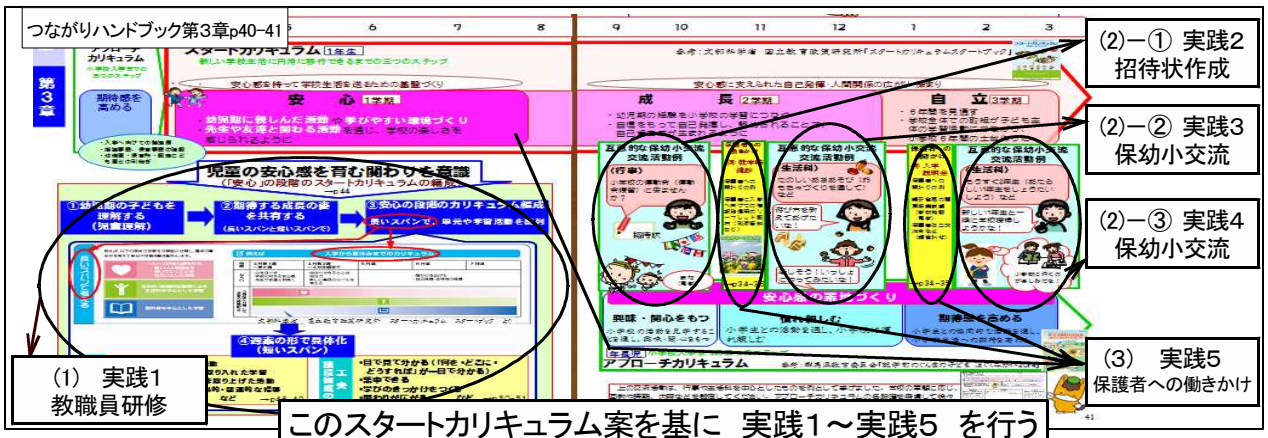
(3)　保護者への働きかけ(実践５)

実　践　内　容	実　施　日　・　対　象	関連する資料
保護者会の工夫	平成28年６月30日　現１、２年生保護者31名	◎「つながりハンドブック」p34-35
	平成29年１月17日入学説明会　新１年生保護者14名	
資料配付、入学前の準備について	平成28年10月18日就学時健診　新１年生保護者14名	◎保護者向けリーフレット

2　検証計画

	検　証　の　視　点	方　法
検証場面1	**『つながりガイド』を活用した教職員研修・体制づくり** (1)幼児教育及び入学時における児童の安心感を育む手立てとしての「スタートカリキュラム」の考え方や編成方法について、理解が図られたか。 (2)組織対応のよさの共通理解や、教職員の協働体制の構築に有効であったか。	①研究協力校、長期研修員への質問紙調査、聞き取り調査 ②日常、会議等の様子観察　＊(2)のみ
検証場面2	**『つながりガイド』を活用した関わりづくり** (1)互恵的な保幼小交流へ向け、事前に教職員・保育者の意識の醸成を図ることは、互恵的な保幼小交流の実現に有効であったか。	①研究協力校・園への質問紙調査、聞き取り調査 ②児童・園児の発言、行動観察、ワークシート *園児の見取りは保育者に依頼
	(2)保護者への働きかけ（保護者同士のつながりを築く機会の設定、家庭と小学校とで共に子どもを見守り育てていくという情報発信）は、保護者の安心感へつながったか。	①保護者会や説明時の様子の観察 ②保護者への質問紙調査、聞き取り調査

3　『つながりガイド』を活用した実践

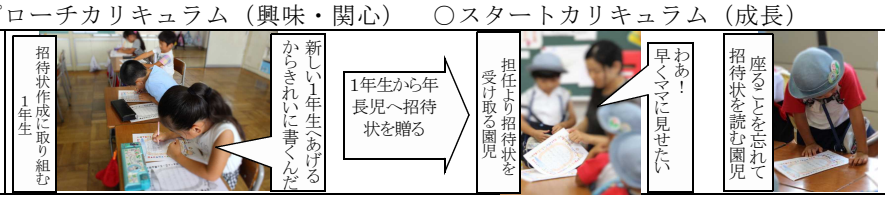


(1)　研究協力校（８月24日）、平成28年度長期研修員（11月９日）への教職員研修実践（実践１）

主な研修内容　○主な活動　・留意点	参加者の発言・活動の様子等	ハンドブック
１．研修内容の把握（５分） ・プレゼンテーション資料を用いながら、本研修についての概要を伝えることで、教職員が研修のねらいを把握することができるようにする。	 つながりハンドブックを見ながら研修を進めることを確認	
２．見通しを持った児童理解（20分） ○幼児教育の概要について理解を図る。 ・資料を活用し、幼児教育の概要についての理解を図ることができるようにする。 ・幼児期からの学びのつながりを意識してもらうことで、「スタートカリキュラム」の考え方についての見通しを持つことができるようにする。	 ・環境の構成って、道具などを出すことかな。 ・人間関係がねらいの環境の構成って何だろう。声を掛けてあげるのかな。	4 ～ 24
３．参加体験型研修（47分） ○「スタートカリキュラム」の考え方について知る。 ・プレゼンテーション資料を用いて説明することで、スタートカリキュラムの考え方について理解できるようにする。 ○育てたい児童像、短期の指導のねらいを立てる。 ・ねらいを立てる際には、学校教育目標を視野に入れることで、スタートカリキュラムの目標が、学校の目指す児童像につながるよう意識できるようにする。 ・入学当初に身に付けさせたいことや重点を洗い出すことで、短期のねらいを立てることができるようにする。 ○例示を基に、短期のねらいに沿った入学当初のスタートカリキュラム（週案）をグループで考える。 ・演習を行うことで、入学当初の新１年生への関わり方についての理解を深めることができるようにする。 ○入学当初の指導例を、ロールプレイングを通し体験する。 ・入学当初の指導例をロールプレイングで体験し、その指導を通して、教員が何をねらいとしていたのかを考えることができるようにする。	○１回目の実践を受け、２回目のワークシートを改善 ・段階的に、ピンクの人間関係を築く関わりの部分を減らして、緑の教科の部分を増やしてくんだね。 ・教科じゃなくても、人と関われる活動も良いよね。宝探しなんかも相談しながらできそうじゃない？ ・この日は、身体測定があるから、その前にゲーム的に体育の「並べるかな」を入れると良いかもね。 ・「聞くこと」を意識したんじゃないかな。	38 ～ 41 42 ～ 45 46 ～ 49
４．まとめ（８分） ・プレゼンテーション資料を用いて県内の小学校の取組などの身近な実例を紹介することで、組織的対応のよさを理解することができるようにする。		

(2)　所属校小学校１年生と研究協力園、新入学児童との交流実践

①　年長児への招待状作成・配布（小学校の運動会への招待）（実践２）

活動内容	小学校運動会への招待状作成及び招待状の配布・発送
対　　象	研究協力校　小学校第１学年17名、平成29年度　新入学児童14名
実施期間	平成28年９月６日～９月７日
各接続カリキュラム	○アプローチカリキュラム（興味・関心）　○スタートカリキュラム（成長）
主な活動の流れ ・新入学児へ運動会の招待状を作成（１年生） ・招待状を受け取る（年長児）	 招待状作成に取り組む１年生 新しい1年生へあげるからきれいに書くんだ 1年生から年長児へ招待状を贈る 担任より招待状を受け取る園児 わあ！早くママに見せたい 座ることを忘れて招待状を読む園児

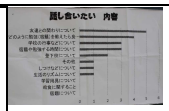
②　授業実践「たのしいあきいっぱい」「つくろうあそぼう」・事前打合せ（実践３）

単元名　生活科「たのしいあきいっぱい」「つくろうあそぼう」○アプローチカリキュラム（慣れ親しむ）　○スタートカリキュラム（成長）	
対　象　研究協力校　小学校第１学年17名　　研究協力園　平成29年度新入学児童９名	
実施日　事前打合せ：平成28年10月20日　　保幼小交流：平成28年11月１日（９月29日～11月１日）	
主な活動の流れ	子どもたちの発言（○）や活動の様子（◇）・その他（・）
事前打合せ ○当日の流れ、持ち物、準備物等の確認 ○「保幼小交流用支援シート」を用い、各接続期のねらいを把握し、子どもへの関わり方を共通理解する。 ○施設見学（玄関、水回り、教室、会場、控え室等）	 ・１年担任が、保育者へ卒園児の現在の頑張りを伝えるなど、和やかな様子で打合せが進む。 ・保幼小交流用支援シートを活用し、打合せを実施。子どもへの関わり方などについて依頼したり、確認したりする。
授業実践 **１．学習課題の把握・初めましての会（10分）** ・自分が作ったおもちゃで園児と楽しく遊ぶ中で、園児の喜びを実感することで、人と関わることの楽しさが分かり、自分自身の成長に気付くことができるようにする。 **２．各おもちゃコーナーにて交流（25分）** ・スタンプラリーカードを用い、各コーナーで遊びを体験することで、全てのコーナーにて交流ができるようにする。 **３．学習のまとめ・終わりの会（10分）** ・交流が互恵的であったことを共有できるようにし、次の交流への期待を持たせる。	握手と一言 ○遊びに来てね ○よろしくね ◇年長児は、握手とともに声掛けをしてもらったことで、次第に笑顔になる ドングリごま ○なんか、うまく回らない ○こうやって両手で回すよ 次の遊びへ案内 ◇自然と手をつなぎ、次の遊びへ誘導する1年生 ハイタッチでお見送り ◇打ち解け、　互いに笑顔を見せる ○また来てね ◇列後方の1年生を見付けてハイタッチをしに行く園児も見られた

③　授業実践「もうすぐ　２ねんせい」、５－５交流（実践４）

単元名　生活科「もうすぐ　２ねんせい」他　○アプローチカリキュラム（期待感を高める）　○スタートカリキュラム（自立）	
対　象　研究協力校　小学校第１学年17名　小学校第５学年26名　　平成29年度新入学児童14名	
実施日　平成29年１月17日（12月13日～１月17日　小単元：「あたらしい　１ねんせいを　しょうたいしよう」実践期間）	
主な活動の流れ	子どもたちの発言（○）や活動の様子（◇）・その他（・）
５－５交流（５年生と５歳児：年長児の交流） **１．年長児親子を校舎内見学へ**（廊下からの低学年の授業参観） **２．壁面制作**（来年度４月の１年教室にて掲示予定）	新1年生親子へ校舎内の案内をする5年生 ○階段だからゆっくり行くよ ◇子どもたちの様子を見て笑顔になる保護者 一緒に壁面飾りを制作 ◇5年生に手伝ってもらいながら、桜の花の台紙に、絵等を描く年長児
授業実践 **１．学習課題の把握・始めの会（10分）** ・来年度入学してくる新しい1年生に、喜んでもらいたいという思いを持ち、学校生活のことを分かりやすく工夫して教えたり、一緒に楽しく遊んだりすることができるようにする。 **２．学校体験（30分）** ・小学校生活をイメージできるような学習面、生活面での活動を体験してもらうことで、年長児に小学校への期待感を持たせられるようにする。 **３．学習のまとめ・終わりの会（５分）**	音楽に合わせ身体を動かしながら交流 ○これ、楽しい！ ◇年長児の手を優しく取り、「なべなべそこぬけ」を一緒に踊る1年生 ランドセル体験 ○わあ、重たい ◇年長児に帽子をかぶせてあげる1年生 自分の名前を書いてみよう ○上手に書けたね ◇年長児は真剣な表情で取り組む ◇1年生が赤丸を付けると、笑顔を見せる年長児 積み木で形遊び ○高い！ ○持ってあげるから、上に積んで ◇楽しみながら活動する年長児と1年生

(3)　保護者への働きかけ（実践５）

実施日・対象	活　用　の　様　子　等
１，２年合同保護者会 平成28年６月30日 現１，２年保護者31名 **保護者向けリーフレット配布他** 説明「入学前の準備について」 平成28年10月18日就学時健診時 新１年生保護者14名 **新入学児童保護者交流会** 平成29年１月17日入学説明会時 新１年生保護者14名	話合う内容表示  事前に1年保護者より、保護者会で話合いたい項目について質問紙調査を実施。当日は、その結果をグラフで表示 グループで交流 1. アイスブレイク 2. グループ交流 ＊研究協力校は、小規模校のため1,2年合同の保護者会を企画。 学校の規模により、学年単位での実施も可 保護者向けリーフレット配付 左のページ 保護者のニーズに対応 新入学児と共に読めるよう、ひらがなを中心に作成 右のページ 小学校教諭と小学校養護教諭のニーズに対応 説明を受ける保護者 ・リーフレットを用いた「入学前の準備について」の説明を受ける保護者 ○子どもと一緒に見られそう 保護者の顔合わせ ・アイスブレイク 保護者同士の初めての交流 ・全員の顔が見えるように大きな円になり交流 グループで交流 ○◎◎の母親の◎◎です。娘の良いところは、絵本が好きで、私にも絵本を読んくれるところです。

Ⅴ　研究の結果と考察

１　『つながりガイド』を活用した教職員研修・体制づくり

(1)　『つながりガイド』を活用した教職員研修によって、幼児教育及び入学時における児童の安心感を育む手立てとして「スタートカリキュラム」の考え方や編成方法について理解が図られたか。

①　質問紙調査、聞き取り調査、演習中の様子の観察から

質問紙調査の結果からは、どの項目においても、１回目の実践と比較して、２回目の方が数値が伸び、より深く理解が図られたことが分かる(図９、10)。特に、１回目の実践で、課題が見付かったスタートカリキュラムの編成方法については、「大変良く理解できた」「良く理解できた」を合計した結果が、１回目の22.2%から86.4%と大きく上昇し、実際の場面に即したより理解しやすい内容となったと考えられる。これは、地域性や学校規模等に柔軟に対応し、各校の実践や週案等に「スタートカリキュラム」の考え方を取り入れたり修正したりしながら編成していく方法へと改善し、ねらいを絞って演習を行ったことが要因として考えられる。記述式の回答からは、次のような意見を得られた。

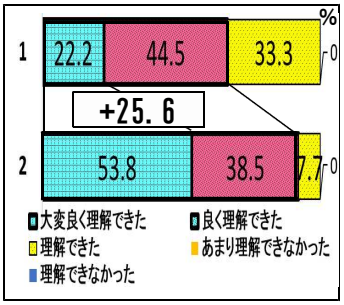


図９　幼児教育の理解

注：上段：１回目の実践

下段：２回目の実践

(図10も同様)

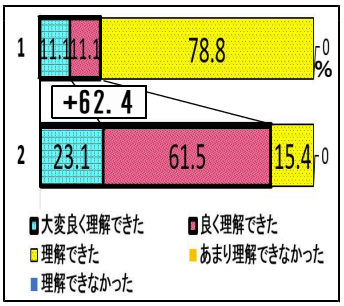


図10　スタートカリキュラムの編成方法

- 幼小連携や幼稚園などについて、あまり理解できていなかったので、今回の研修で理解が深まり大変参考になった。
- 幼保のアプローチカリキュラムについてとても良く分かった。今後１年生を担任するときに役立てたい。
- スタートカリキュラムを作成するには、合科的指導が必要で、見通しを持って作成することが大切だと分かった。
- 幼稚園から小学校へ、児童が安心して生活できるように、周囲の大人が環境を整備することがとても重要だということが分かった。

これらの意見から、今回の研修が幼児教育の理解につながったと考えられるとともに、今後の児童との関わりに生かしたいという考えを持った教職員がいることが分かった。また、児童の安心感を育むための「スタートカリキュラム」の考え方について、理解が図られたと考えられる。さらに、「週案にねらいを入れることが大切だと思い参考になった」「安心感を持たせるための工夫や視覚的支援の必要性が、ワークショップを通じて実感できた」「環境構成の工夫は、インクルーシブな視点にもつながり、みんなに分かりやすいと思った。『自分でできた』という経験が不安を軽減し、自信につながると思った」という意見から、幼児教育の考えを生かすスタートカリキュラムの編成方法が、演習を通して具体的に理解できたと考えられる。

(2)　『つながりガイド』を活用した教職員研修・体制づくりは協働体制の構築に有効であったか。

①　質問紙調査、聞き取り調査から

質問紙調査の結果より、２回目は「大変良く理解できた」の項目に32.3%の伸びが見られ、より深く理解が図られたと考える。これは、２回目の実践には、県内などで組織的な対応を行っている実際の取組例やその効果について紹介するなど、身近な例を取り上げることで、より実感を伴った理解へとつながったためと考える。

②　日常観察、職員会議等の様子から

秋の保幼小交流へ向けた授業実践の際には、「これ拾ってきたから、１年生で使って」などと、数名の教職員から秋の実の提供を受けたり、秋の実を使ったおもちゃ作りの際には、どんぐりの穴あけの協力の申し出を受けたりするなど、好意的な反応が見られた。接続の取組への理解が進んだと推察できる。また、３学期の保幼小交流へ向け、保護者のニーズ等も反映した実施計画の提案を職員会議にて行った。その際、教職員より「新入学児童の保護者は、高学年の授業というより年の

近い１年生や２年生などの低学年が、どんな風に授業をしているのかを見たいのではないか」「その日は、１年生は下校時刻になってしまうので６校時がある日に日程を調整すれば実施できる」「５年生も、来年度は最高学年として新１年生と関わる。新１年生との交流は、子どもたちにとっても有意義なものだから、交流に協力します」など、実施へ向けた建設的な意見が出された。この会議を受け、入学説明会時には、保幼小交流や新１年生の保護者も含めた校舎見学（在学児童の授業参観を含む)、新１年生と新６年生による交流も実現し、次年度の関わりを意識した取組へと広がりを見せた。また、これから６年間一緒になる保護者同士の交流も併せて行われた。これら保護者への働きかけも含めた接続への取組は、今後も継続して実施できる体制づくりも整った。

以上の(1)～(2)のことより、『つながりガイド』を作成し、教職員研修や体制づくりの場面で活用したことは、幼児教育及び入学後の児童の安心感を育むためのスタートカリキュラムの編成方法についての理解を図るとともに、教職員の協働体制を構築する上で有効であったと考える。

２　『つながりガイド』を活用した関わりづくり

(1)　『つながりガイド』を活用した互恵的な交流へ向け、事前に教職員・保育者の意識の醸成を図ることは、互恵的な交流の実現に有効であったか。

①　研究協力校・園への質問紙調査、聞き取り調査から

「互恵的な交流」について、交流に関わった教職員や保育者全員が、「良く理解できた」と回答した。また、「互恵的な交流を意識して子どもたちに関われたか」の項目についても、「十分に理解して関われた」「意識して関われた」と回答し、これらのことから、互恵性を意識した交流ができたと言える。また、「教職員間でも、打合せ（交流用ワークシート等）で、互いのねらいを知ることにより、より一層、視点を定めることができ支援や評価もしやすかった」、「１年生の積極的に誘いこんだり、園児の手を取る姿から、今回の交流活動の準備段階から丁寧に時間をかけ進め、また『新１年生が楽しめるように』ということを意識して取り組んできた様子がうかがえた」などの記述があり、事前の保幼小の打合せで「保幼小交流用支援シート」を活用し、互いの接続上のねらいを知ることにより、子どもたちへの働きかけの視点が明確になり、より充実した保幼小の交流へとつながったと感じていることが分かった。実践へ向けた授業においても、１年担任は、常に新１年生を意識できるように児童へ声を掛けるなど、一貫した指導を行っていた。そして「園児たちは、１年生とやり取りするうちに打ち解け、楽しむことがでた。１年生に対して憧れを抱き、小学校への期待にもつながった様子だった」「細かなところまで準備されており、とても充実した時間だった。子どもたちも『楽しかった』と話しており、家庭でも楽しかったことをたくさん話したようだ。このような交流会を通して、園児たちは小学校への進学にますます期待が高まりとても良い活動だと思う。このような交流会を通すことで幼・保・小の連携が強くなると思う」とあり、新１年生の小学校入学を期待する気持ちを高めることもできたと考えられる記述が見られた。さらに、保幼小の交流の授業を参観した教職員からは、「握手のスキンシップからのスタートや１年生から園児への優しい言葉掛けも良かった。カードの下げ方、遊びのコーナーの配置など、配慮が至るところで見られた」「初めての交流会、今後も続けていってほしい。一人で入学することの不安は、大きいものだと思う。今後の交流会も楽しみだ」など、これらの実践を通し、研究協力校においても新一年生を迎える意識が高まったと考えられる感想が寄せられた。

②　児童・園児の発言、行動観察(ワークシート)から

小学校の運動会の招待状作成を通し、１年生が、年長児に喜んでもらいたいという気持ちを持てたり、気持ちが伝わるよう丁寧な書き方をしたりできるよう支援を行った。１年生は、知っている年長児もいたこともあり、嬉しそうな表情で、真剣に取り組むことができた。また、年長児は、招待状を見た瞬間に歓声を上げ、「早くママに見せたい」「１年生、字が上手」などの声を上げたり、席に座ることを忘れて読んだりする姿も見られた。年長児の担任からは、「とても良い表情、反応をしていた。１年生から直接手紙をもらうことは、子どもたちにとってもうれしいことだし、園児は、小学校の運動会に招待されたんだ、という気持ちをしっかり持てたようだ」「自分の字と比べ、

１年生の上手に書けた字を見て、１年生すごい、と感心していた」との感想が聞かれた。これらのことから、直接１年生から招待状をもらったことで、小学校に関心を持つことにつながったと言える。

保幼小交流中、１年生は、年長児へ「まだやっていない遊びは何。こっちだよ」などと声を掛け、自然と手をつなぎ誘導する姿が多く見られた。また年長児も、「○○君、これ教えて」など、１年生へ声を掛け、遊びを教わる様子も見られた。この授業実践後の児童のワークシートからは、「新しい１年生に、やじろべえのやり方を教えるのが、すごく楽しかったです」「上手だねと拍手してほめてあげました」「ぼくは、新しい１年生と遊べてうれしかったです。いっぱい教えてあげました」など、新１年生を迎える側を意識して年長児と関わり、自分の成長を感じている様子が見られた。そして、「幼稚園の人とか保育園の人たちが楽しそうでした」「教えるのも良くできました。みんなが楽しそうだったので良かったと思います」など、自分達が準備した遊びを通して年長児と関わり、年長児が楽しむ姿を見ることで、１年生も楽しく過ごすことができたと考えられる記述が見られた。３学期の交流は、関わる新１年生の担当を決め、１年生と年長児がじっくり交流できる機会とした。２度目の交流であったため、すぐに打ち解け自然な様子で交流を行うことができていた。積み木を重ねて形遊びをしながら、「持っててあげるから、上に積んでみて」などの発言が聞かれ、笑顔が多く見られた交流となった。また、交流後には、「新しい１年生、楽しんでくれたかな。一生懸命にやったんだ」という言葉も聞かれ、新１年生に喜んでもらいたいという思いを持ち、１年生が主体的に交流を行うことと併せ、これまでの交流などを通し、自立への基礎を養うことができたと考えられる。年長児からは、交流をしている絵や、「かわいいどんぐりでてづくりのこまでいえにかえってあそびました」「たのしかったです。またこんどあそびにいくのおたのしみにしています」（２例とも原文ママ）などの手紙が小学校へ届いた。交流を通して楽しい気持ちを味わい、小学校への期待感を高め、安心感の素地を育むことができたと考えられる。

以上の①、②より、『つながりガイド』を作成し、保幼小交流へ向けた取組等において活用することは、教職員・保育者の意識の醸成を図り、互恵的な交流を実施する上で有効であったと考える。

(2)　保護者への働きかけ（保護者同士の関わりを築く機会の設定、家庭と小学校とで共に子どもを見守り育てていくという情報発信）は、保護者の安心感へつながったか。

①　保護者会や説明時の様子から

保護者会の工夫の場面では、初めに「この保護者会のねらいは、共に子どもを見守る関係となるきっかけとしてほしいことである」と参加者へ伝えた。そして、和やかな雰囲気となるよう、アイスブレイクとして、握手を交えた自己紹介をする時間を設けた。徐々に会話が始まり、にこやかな保護者の表情とともに、会場は話し声でいっぱいとなった。その後は、どのグループも子どもの話題や子育てについて談笑している様子が見られ、終了時刻の合図をしても、中々話が終わらないなど、活発な意見交換が生まれ、盛り上がりを見せた。また、就学時健診時における、新１年生の保護者への資料配付及び入学前の準備についての説明では、リーフレットを用いながら具体的な話をすると、保護者はうなずいたり、笑顔を見せたりするなど積極的に話を聞く様子が見られた。最後に「学校と家庭とで、共に子どもたちを見守っていきましょう。心配なことがあれば、遠慮なく相談をしてください」とのメッセージを伝えると、大きくうなずく保護者が多数見られた。

②　保護者への質問紙調査、聞き取り調査から

保護者会後の記述式の回答から、「初めての参加だったが、とても良かった」「保護者会の前は、話すことはないと思っていたが、少人数や話の前の握手などがあり、和やかに話ができた。良い会だったと思う」などのように、和やかな雰囲気づくりもあり、保護者同士が子育てについて意見交換を行いやすい場の提供ができたと考える。また、リーフレット配布後には、聞き取り調査を行った。「子どもと一緒に楽しく見られそう」「初めはこういう風に進むんだなっていうのが分かる」「写真とか、イラストとかあって、見やすいし学校の様子が分かりやすい」などの感想が聞かれた。また、「子どもと一緒に楽しく見られそう」との感想を持った保護者は、その後、子どもが健康診断から戻り一緒になると、すぐにリーフレットを子どもへ見せて、会話をしながら、共にリーフレッ

トを読む姿が見られた。さらに、「幼小の子どもたちの交流の機会を作ってもらったり、保護者の交流やリーフレットがあったりして、子どもも親も安心です」など、保幼小接続に関する取組に対して安心できるとの発言もあった。入学後の１、２年生合同保護者会後の質問紙の調査からも、全員の保護者が、保護者同士の交流や情報交換できたことに対し、大変満足できたということことが分かった。これら①、②の結果より、『つながりガイド』を作成し保護者への働きかけにおいて活用することは、保護者の安心感へとつながったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　『つながりガイド』を活用した教職員研修・体制づくりを通して、接続期における児童の安心感を育む関わりについての理解を図ることができた。このことにより、研究協力校においては、接続の取組への協力を得ることができ､次年度の関わりを意識した交流が他学年にも広がるなど、小１接続期における児童の安心感を育むための協働体制を構築することができた。また、研究協力校・園においても、今後も継続して交流を行える体制を整備することができ、年長児の小学校進学への安心感の素地を育む機会を設けることができた。

○　保護者への働きかけにおいては、保護者への直接の働きかけとともに、保幼小交流を通した子どもたち(年長児)への働きかけの双方が、保護者の不安感の軽減へとつながり「子どもも親も安心」という保護者の言葉に現れることとなった。

２　課題

○　『つながりガイド』では、質問紙調査の結果に基づき「スタートカリキュラム」の周知をねらいとした。そのため、「スタートカリキュラム」の考え方及び編成方法は、導入的な内容を中心に扱った。今後は、スタートカリキュラム編成を終えている学校向けの内容を提案するなど、別の視点からのアプローチも考える必要がある。

○　本研究では、「児童の安心感を育む関わり」の方法や理解、及び年長児の「安心感」の素地づくり等についての実践・検証を行った。今後は、「安心」の段階における実践を通した検証を行い、教材がより良いものになるよう改善を図っていく必要があると考える。

Ⅶ　より良い実践へ向けて

本研究においては、作成した『つながりガイド』の有効性について、小学校教職員及び保育者並びに低学年児童の保護者への事後の質問紙調査・聞き取り調査などや、子どもたちの発言の聴取・行動観察・ワークシートへの記述などから確認することができた。小学校教職員、保育者が共通のねらいを持って子どもへ関わる機会を足がかりとし、今後は、小学校教職員、保育者等が更なる情報共有ができるよう校種間を超えた体制づくりを進めていく必要があると考える。本教材を、そのような機会に導入の資料として使用するなど、互いの教育を理解するきっかけづくりとして活用することで、小学校教職員・保育者、家庭との連携を促す一助となると考える。子どもたちのために何ができるのか、と共通の思いを持つことが、より良い接続の取組へとつなげる原動力になるのではないだろうか。

〈参考文献〉
・文部科学省　国立教育政策研究所「スタートカリキュラム スタートブック」(2015)
・文部科学省　生徒指導提要
・群馬県教育委員会「就学前の　ぐんまの子ども　はぐくみガイド2014」(2014)
〈担当指導主事〉
野原　亮　　柴山　和宏